

## 小千谷の老舗割烹

# 二百五十年の歴史を

# 消すことはできない

小千谷船岡公園の坂道を下っていると、かつて「下夕町」と呼ばれた一帯がある。河岸段丘の傾斜地を上手く利用した木造三階の建物がひときわ目をひく。小千谷の歴史を物語る老舗割烹「東忠」である。地震で大きな被害を受けながらも、半年後には営業を再開。老舗の歴史と想いを十代目ご当主の東亮一さん、奥様で女将の八重子さんに聞いた。

○東忠の屋号と歴史について教えてください。

初代・東忠<sup>ひがしちゆうへい</sup>兵衛が分家して、江戸時代の半ば頃、約二百五十年くらい前に、この地で料亭を始めました。その名に因んで「東忠」を屋号としています。「東忠」の前の湯殿川には信濃川に通じる船着場がありまして、この川に沿った道が昔のメインストリートです。兩岸には料亭や芸者衆の置屋などが並び、とてもにぎやかだったそうです。昭和四十年頃までは界限に十六軒の料亭がありましたが、今では昔からの店は私ども一軒だけになってしまいました。

○河井継之助が小千谷談判の後で「東忠」さんに寄ったと伝えられています。すが、そのお話を聞かせてください。

河井継之助と藩士の二見虎三郎は、「野七」という小千谷の旅館を宿にして慈眼寺で西軍軍艦の岩村精一郎との会談に臨みました。会談は決裂



「東忠」

十代目主人 東 亮一さん  
女将 八重子さんに聞く

聞き手・川口宗伊（茶道教授）



梅の間

し、「野七」への帰り道に「東忠」に寄って、二階の「梅の間」で遅い昼食を取られました。長岡藩の家老に対して、奉公人に給仕をさせるわけにもいかず、家の「ふさ」という娘に給仕をさせたようで、ふささんがその時のことを私どものおじいちゃんに、よく語って聞かせたようです。司馬遼太郎の「峠」が毎日新聞で連載された時は、このことが書かれていたのですが、単行本として出版された際に、この部分がカットされており、残念に思っています。この他にも、「北越雪譜」のことや詩人の西脇順三郎さんにまつわるエピソードなども伝わっています。

○中越地震で大きな被害をうけられたようです。

古い建物なので、増築部分はずれ、土壁がほとんど落ちて、また、土蔵が崩れたりして大変な状況でした。暮れには廃業を考えまして、支援してくださっていた方にご挨拶に伺ったら、こちらが話を切り出す前に察して、「東忠」を閉めてはならないと諭されました。町の皆さん自身も被害を受けて苦しいのに、多くの方から支援をいただいて、本当に感謝しております。約半年休業していましたが、翌年の四月に再オープン致しました。あの時ほど、この仕事を愛おしいと思ったことはありません。あんな経験は二度とはしたくはありませんが、地震がなければ、そのことに気がつかなかったかも知れません。

○老舗としての今後についてお聞かせください。

一番大切なことは古臭さを感じさせないということだと思っています。老舗のためか、「東忠」は敷居が高いと思われることもありますが、古い「東忠」をご存知でない若い世代の方々には婚禮などでご利用いただいてもおります。古さを感じさせない「和モダン」な印象で、その折々に、お客様のご要望に対応させていただきたいと思っています。

